Ⅰ：宗教現象としてのキリスト教

＜前回＞　儀礼とサクラメント

１．儀礼：「一定の目的に向けてパターン化された宗教的行為（パフォーマンスとアイテム）の象徴体系」、宗教の客観的側面（制度・組織）、機能主義的研究、構造主義的研究。

２．通過儀礼：共同体の構成メンバーが人生の節目（社会的身分の変化）を無事に通過できるように支える制度的な仕組みとして設定された儀礼（成人式、結婚式、入会儀礼など）

３．儀礼の構造分析（境界・リミナリティ・コミュニタス）→　構造とその更新

４．洗礼式：キリスト教の入会儀礼、
　　水のシンボリズム：死と再生

５．サクラメント(sacramentum)：「不可見の神・神の恩恵の具体的徴」
　　非日常的な神あるいは神の働きをヒエロファニーとして顕わにする宗教的象徴（象徴体系）

６．ローマ・カトリック教会におけるサクラメントは、次の７つである。
　　cf:プロテスタント教会（①と⑥のみ）
　　①洗礼(baptism)　②堅信(confirmation)　③叙階(holy orders)
　　④婚姻(matrimony)⑤終油(extreme unction)
　　⑥聖餐(eucharist)⑦悔悛(penance)

　サクラメントは神自身の働きによるのであるから、いったん執行されたサクラメントは人間の都合で打ち消すことができない。

７．キリスト教的な時間秩序（時の形態化）
　サクラメントによって図式化されたキリスト教徒の時間経験
　「生涯―１年―１週」の重層的な時間＝「キリスト教的なライフ・スタイルの時間軸」

８．結論
　「宗教とは生（生活、生涯、生命）の形態化である」。具体的には、次の三つの相に分節できる。

信仰	→	究極的関心・自己同一性	→	行為の形態化
聖なるもの	→	ヒエロファニー	→	空間の形態化
儀礼	→	ヒエロファニー	→	時間の形態化

９．祭り：神話と儀礼の複合的な象徴体系
　祭りの変遷：「犠牲を捧げる儀式→フェスティバル＝祝祭」の移行、歴史化、世俗化

10. 祭り研究の三つのポイント
　　1)祭りの歴史的起源と変遷　　2)祭りの機能
　　3)祭りの構造

11. キリスト教の三大祭り：イースター、ペンテコステ、クリスマス

12. 祭り研究（フィールドワーク）の手順

第７講：聖書を読む

１　聖書の構成と概略

聖書は、キリスト教の正典(canon)であり、キリスト教信仰にとっての基盤であると同時に、多くの研究者を引きつけてきたキリスト教を論じる際の基礎テキストである。すでに膨大な研究が蓄積されているだけでなく、その数は日々増大しつつある。ここでは、聖書をどのように読むのか、という問題に入る前に、まず聖書の概略について、基礎知識を確認しておこう。

１．聖書の諸文書と正典化

キリスト教：旧約聖書（原典はヘブライ語）　３９文書

新約聖書（原典はギリシャ語）　２７文書

カトリック教会では、旧約聖書外典（続編）１５文書も正典に数える。

cf.　ユダヤ教では、キリスト教における旧約聖書（ヘブライ語聖書という呼称が広まりつつある）だけが聖書。

イスラム教のコーランには聖書が部分的に組み入れられている。　→　聖書的宗教

２．聖書の内容の多様性（分析・分解）

聖書と一口に言っても、それに含まれる文書の文学ジャンルは多様であり、内容も多岐にわたる。

旧約聖書：

律法（モーセ５書）：創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記

歴史：ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記上下、列王記上下、
歴代誌上下、エズラ記、エヘミア記、エステル記

預言：イザヤ、エレミア、エゼキエル（三大預言書）
ホセア、ヨエル、アモス、オバデヤ、ヨナ、ミカ、ナホム、
ハバクク、ゼファニヤ、ハガイ、ザカリア、マラキ（１２小預言書）

諸書：ヨブ記、箴言、コヘレトの言葉（知恵文学）
詩篇、雅歌、哀歌
ダニエル書（黙示文学）

新約聖書：

福音書：マタイ、マルコ、ルカ（共観福音書）
ヨハネ

使徒言行録（原始キリスト教史）

書簡：ローマ、コリント１・２、ガラテヤ、エフェソ、フィリピ、コロサイ
テサロニケ１・２　（パウロ書簡、二次的パウロ）
テモテ１・２、テトス（牧会書簡）
フィレモン、ヘブライ、ヤコブ、ペトロ１・２、ヨハネ１・２・３
ユダ

ヨハネ黙示録（黙示文学）

３．正典化のプロセス＝正統教会・正統教義の形成過程

聖書はキリスト教の正典ではあるが、それが内容的に確定するには、個々の文書が書かれてから（新約聖書の場合は、一世紀後半から二世紀初頭にかけて）かなりの時間が必要であった（四世紀に確定）。正典化の過程は、正統教会あるいは正統教義の形成過程と並行しており、実はこれらの諸過程は、一つの歴史動向に属していたのである。

Ｑ：正統とは何か。正統―異端の枠組みの成立条件について考察せよ。

４．ヘブライ語とギリシャ語、とくにギリシャ語で書かれたことの意味

キリスト教聖書がヘブライ語を原語とした旧約聖書（ヘブライ語聖書）とギリシャ語を原語とする新約聖書との合本であることは、キリスト教を理解する上で、重要な意味を持っている。これは、次講で触れるキリスト教起源神話の成立（＝古代イスラエルの起源神話の改訂）の状況を反映しており（マック）、また、新約聖書がギリシャ語で書かれたことは、キリスト教がヘレニズム都市を拠点とした都市型宗教という道を選択したことを示している。

２　正典論と霊感説

（１）聖書をどう読むか

１．聖書とは？

聖書は次の二つの仕方で、読まれてきた。

	聖書とは何か	聖書の言語性	読み方の基本
正典論	宗教書・聖なる書物	神の言葉（神言性）	信仰、霊感
近代聖書学	歴史的文献	人間の言葉（人言性）	理性、一般的な文献読解の方法論を使用

２．キリスト両性論

聖書が二つの仕方で理解され読まれてきたことは、キリスト教自体の立場に即して説明できる。

「イエス・キリストは、真の神、真の人である」（キリスト両性論）

→　聖書テキストの神言語と人言性

したがって、聖書学的読み方は、それ自体としては必ずしも非キリスト教的ではない。それは、信仰と両立することも可能である。

３．本講義で想定している聖書の読み

・読者は現代人・非キリスト教徒である。

・基本的には、聖書をどう読もうと個々人の勝手である。

・しかし、学問的な水準で読みたいならば、聖書とはどんな書物であるかに即した読み方が要求される。

４．聖書の歴史性に注目する読解方法　→　聖書と現代との歴史的距離を意識する。

近代人の日常性・歴史意識における読みを目

ざす。

1)宗教書として成立し伝承され、そのように読まれることが意図されているという歴史的事実を尊重する。→　しかし、自分にとっての「神の言葉」としてではなく、「神の言葉として読まれることが意図されているもの」（信仰共同体の文書）として。

→　聖書テキストの解釈からキリスト教思想へ（後期の講義へ）

2)一般的なテキスト解釈学の方法論を採用する。つまり、聖書学の方法論に依拠する。文献学的、歴史学的、構造主義的、文芸批評的など。

3)テキストの歴史性／構造性・文学性／思想性に注目する。

（２）正典論とは

５．信仰共同体の文書　→　正典

・信仰と生活の規範（尺度）　→　権威性（使徒性）

・神の言葉（聖書の著者であり、解説者としての聖霊）

→　霊感によって成る、聖霊の内的証示

・閉じた聖典（増減の禁止）、預言時代の終了

・こうした議論の論理構造は、循環論法という形態をとる、解釈学的循環内部の読解・議論。

６．日本基督改革派教会／信条翻訳委員会訳『ウェストミンスター信仰告白』新教新書「第一章　聖書について」から

一　「……主は、いろいろな時に、いろいろな方法で、ご自身の教会に対してご自分を啓示し、み旨を宣言し、また後には、その真理を一層よく保存し広げるために……その同じ真理を全部文書に委ねることをよしとされた。これが、聖書を最も必要なものとしているのであって、神がその民にみ旨を啓示された昔の方法は、今では停止されている。」

四　「……聖書の権威は、どのような人間や教会の証言にも依拠せず、（真理そのものであり）その著者であられる神に、全く依拠する。従って聖書は、神のみ言葉であるという理由から、受けいれられなければならない……」

五　「……聖書の無謬の真理と神的権威に関するわたしたちの完全な納得と確信は、み言葉より、またみ言葉と共に、わたしたちの心の中で証言して下さる聖霊の内的みわざから出るものである。」

六　「神ご自身の栄光、人間の救いと信仰と生活のために必要なすべての事柄に関する神のご計画全体は、聖書の中に明白に示されているか、正当で必然的な結論として聖書から引き出される。……何ひとつ付加されてはならない。……神のみたまの内的照明が必要であること……」

七　「聖書の中にあるすべての事柄は、それ自体で一様に明白でもなく、またすべての人に一様に明らかでもない。……」

九　「聖書解釈の無謬の規準は、聖書自身である。……」

７．霊感とは？

・逐語霊感説　→　啓示即聖書（聖書の文言が実体的自体的に神の言葉）、静的霊感説
・動的（dynamic）霊感説

聖書的霊感は、そのつどの受け手（読み手）の状況に応じて、出来事として生じる。聖書テキストと読者との相関の出来事（本講義の言い方では、ＳとＯの相関）。

聖書が霊感的なメッセージとして受け取られるには（わかった！、という経験）、受け手の受け止め方が問題となる（解釈学的な前理解のあり方が霊感の成立を左右する）。もし、神のイニシアティブ・霊感的作用を考えるとすれば、それは、適切な相関の場の成立のレベルで問われる必要がある。

Ｑ：動的霊感について、「教育効果」の問題との比較において論じよ。

８．静的霊感説と動的霊感説は、サクラメントの効果・正当性をめぐる事効論と人効論との関係に類似している。

３　近代聖書学とその意義

９．聖書は信仰共同体の文書であるが、同時にだれにでもそれなりに理解できる文献でもある。ガンディーが読んだ福音書。

10. 近代聖書学成立の歴史的背景＝啓蒙的近代の知的状況

・近代的な歴史意識（歴史主義）→　近代歴史学の成立、文献学的方法論
18 世紀から 19 世紀にかけて、ドイツを中心に。
歴史学・法学・言語学・聖書学

・新しさの意義、伝統批判、理性の普遍主義

11. キリスト教と近代との関係における二面性

・キリスト教（とくにプロテスタント教会）は、近代世界の成立のいわば母体であって、近代と親近性を有している（近代世界の諸システムの成立に対するキリスト教の積極的寄与）。キリスト教あるいは神学は、近代聖書学の成立を支持し促進した（近代聖書学の成果によって、キリストの出来事の意義を裏付ける→一連の「イエス伝」研究）。

・しかし、キリスト教の中には、反近代の立場の伝統も存在しており、聖書学への批判的な姿勢も見られる（→キリスト教原理主義へ）。実際、近代聖書学の成果には、キリスト教的信仰にとってさしあたり都合の悪いものも含まれている。

↓

聖書学と神学の分裂

12. 聖書学的な聖書の読み方

聖書テキストを分析的・批判的に読む　→　解体的読解

伝承史の過程におけるテキスト断片の伝承・収集・編集を遡及的に再現する。

聖書を一冊の書物として統一的に読むことは不可能。

12. 近代聖書学は、現代宗教学と同一の源泉から生まれた。

歴史的・批判的方法

テキストの分析・批判　→　類似　→　連関　→　現在の解釈学的中心性

本文批判、歴史批判、思想批判

13. 日本語訳：文語訳、口語訳、新共同訳（日本聖書協会）、新改訳、フランシスコ会訳
出版社訳（岩波書店、講談社）
個人訳（岩波文庫・関根正雄訳の旧約聖書、田川建三訳の新約聖書の開始）

14. 聖書学関連の Web 情報
「聖書と聖書学」（野本真也）：http://theology.doshisha.ac.jp/nomoto/top.html

15. 学的な水準での聖書読解の前提としての聖書学。方法論的中立性に関わる困難さ。
↓
誤読・誤解の排除という意義

＜参考文献＞

１．『聖書学講座　全四巻』日本基督教団出版局
２．木田献一・荒井　献監修　『現代聖書講座　全３巻』日本基督教団出版局
３．日本基督教団出版局編　『聖書学方法論』
４．出村　彰・宮谷宣史編　『聖書解釈の歴史――新約聖書から宗教改革まで』
日本基督教団出版局
５．Ｐ．シュトゥールマッハー　『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局
６．荒井　献他　『総説　新約聖書』日本基督教団出版局
大貫　隆他監修『新版　総説　新約聖書』日本基督教団出版局
７．石田友雄他　『総説　旧約聖書』日本基督教団出版局
池田　裕他監修『新版　総説　旧約聖書』日本基督教団出版局
８．聖書学の基礎知識・ヨルダン社『様式史とは何か』（マックナイト）、『新約聖書と文学批評』（ビアズリー）、『編集史とは何か』（ペリン）、『構造主義的聖書釈義とは何か』（パット）、『原始キリスト教の書簡文学』（ドティ）
９．渡辺善太　『聖書論　第一巻聖書正典論』新教出版社
10. 上田光正　『聖書論』日本基督教団出版局
11. 青野太潮　『どう読むか、聖書』朝日新聞社
12. 田川建三　『書物としての聖書』勁草書房
13. 荒井　献編『新約聖書正典の成立』日本基督教団出版局
14. バートン・マック　『誰が新約聖書を書いたのか』青土社